

対談

宗教教育の 可能性

いのちのふたが
井上順孝

やまがしりてつみ
山折哲雄

しんがのしま
〈司会〉島蘭 進



司会 本日はお忙しい中、『現代宗教』の対談のために

おいで頂き、まことにありがとうございます。国際宗教研究所の紀要とも言える『現代宗教』は、毎年ホツトな話題を取り上げていますが、今年は「宗教教育」ということで、主に学校における問題を考えてみたいと思います。もちろん宗教教育の中には家庭教育もあり社会教育もあるでしょうが、ここでは、学校教育をひとつの焦点として宗教教育を考えてみたいのです。

日本において宗教教育をどのように進めたら良いかを考えてみると、これまで宗教教育というものがあまりに軽んじられてきたのではないかと——このような認識の深まりが、今回のテーマの背景にあります。オウム事件のときも、次代を担う若者に宗教についての基本的認識がいかに欠けているかが話題となりました。理科系大学院生が数多くオウムに入っていたことが非常に印象的だったのですが、特別な人だけではなく一般社会でも宗教文化への知識が十分ではないように思えます。また、世界中の人々と接する機会が増えているにも関わらず、世界の宗教状況への知識が足りない。さらには、「死」とい

う自分の一生の大問題に向き合うにしても、それに向かう精神的なリソースに欠けている。現在各方面でこのような議論がなされています。

そこで今日は、長年この問題を考えてこられた山折哲雄先生と井上順孝先生においでいただきまして、どうすべきなのか、具体的な提言を含めてお話いただければと考えます。まず、井上先生の方から、その辺りのお考えをお聞かせください。

■宗教教育の現状

井上 私が宗教教育というテーマで研究・調査を始めて十数年になります。一九九〇年に日本文化研究所で宗教教育プロジェクトを興しました。初めは主に宗教系学校の宗教教育の現状ということで、資料を集めたり、実際の教育が行われているのかを調べたりしました。そうするうちに、国内だけではなく国際比較もしてみようということ、いくつかの国について調べましたが、韓国との比較を中心に行いました。

このような中で、宗教系学校の宗教教育の様々な取り

組みにおける可能性とその限界とを感じてきました。その一方で、一般の非宗教系の私立や公立の学校がどうなっているのかに関心が深まり始めました。しかしこれに関して関係者から話を聞こうとすると、非常に難しいのです。公立の学校の先生は宗教教育の話題に警戒心がある。本人が話すことにOKの場合でも学校側が嫌がることもある。また生徒に対してこの話題について聞くというのも難しい。そういうこともあり、公立学校の現状把握は難しいのです。そこで、一九九二年から何度か大

学生を対象にしたかなり大がかりな意識調査をやりました。それによって公立学校を卒業した学生の意識とか考え方もある程度分かりました。調査結果から判断すると、宗教教育がほとんどなされてないように思えます。そこで、神道と仏教の区別がつかず、お寺と神社の区別がつかなくても、何とも思わずに大学に入ってくるような状況が広く見られるわけです。

オウム事件以降、宗教教育ということが注目にされるようになったわけですが、私自身の感触としては、今の現状と宗教教育をめぐってなされている議論の大半

とは、ちょっとかけ離れすぎている印象があります。つまり、現状が十分踏まえられていないということです。理想論を言ってみても、今のような状況では宗教教育に着手することすら難しい。ならば一歩一歩進めるという発想で、どうすれば多少なりとも現状を改善できるかということを考えてみたいのです。

■「宗教文化教育」という方向

井上 そこで到達したのが、「宗教文化教育」の推進という手段です。公立学校での宗教教育を進めようとしたら、宗教文化教育という内容の方が実際のであり、受け入れられやすいということです。

宗教教育は、知識教育・情操教育・宗派教育と三つに分けて議論されることが多いですね。しかし宗教の情操教育については、しばしば意見が対立してきました。公立学校でやれるかどうかについての議論では、賛成・反対の立場の間で、これまでも折り合いがつかっていません。そして、折り合いがつかないこと以上に、宗教情操教育はどうやってやるのかという具体的な手順になると、議



井上順孝氏

論の蓄積もありありません。そういう状態のところでききなり宗教情操教育をやりましようと言っても、先生たちもどうやったらいいかわからないし、当然生徒たちも戸惑う。

そこで、いわばクッションというわけではないですが、発想を変えたらどうかということです。これから様々な宗教や文化の人々と付き合っていかなければならないとするなら、異文化教育の一環として、宗教の学びの要素を、教育の中に取り入れるという発想は受け入れられや

すいはずです。また、自分たちの伝統的な文化についてはよく知らず関心もない人が多くなった。風景としては確かにお寺や神社があつて、お坊さんや神主さんを見かけても、実際それらは何のためにあるのか、自分たちにどう関わっているのかについては、実感が乏しくなっている。このような状況の中では、いきなり宗教情操を教えるというより、宗教文化をもう少し知ろうじやないかという所から始めたほうが良いと思えます。場合によっては少し情操面にまで踏み込むかもしれないが、最初はむしろ知的な面に重きを置いたスタンスで、公立学校の宗教教育の議論がスタートすべきだと考えます。

■宗教教育をめぐる現場の変化

山折 私も、ここ一〇年でものすごく状況が変わつてきたという個人的印象を、強く持っています。ひとつは一九九五年のオウム事件であり、ふたつ目は二〇〇一年の9・11です。これらで宗教がいかに問題かということが、日本列島全域にわたって浸透した。9・11までの日本人の宗教に対する考え方と、それ以後の考え方はかなり違



山折哲雄氏

つてきている。

宗教に対してどういう態度や距離をとるかにについて、様々な考え方があつたのでしようが、これからの若い人の教育は宗教抜きには考えられないし、何らかの形で取り入れていかなければならない——これが相当の世論になつてきた感があります。現場の公立学校の教師も、道徳教育を上から押し付けるのはいけないということで反対することもあるでしょうが、それでも、何とかしなければいけないという気持ちが強くなつてきている。そうい

う点では、宗教教育をきちんと考える時期がようやく来たと思うのです。

この一〇年間、講演会や研究会などで話をしてきて感じたのですが、校長さんや・教頭さん方の中の、ほとんど九五%くらいが異口同音に、宗教教育は絶対必要だと言つたのです。個人的な場ではそう言われるのですが、しかし、教育の現場でどのように取り入れたいのかということになると、まったく見当がつかない——この一〇年、そういう悩みを聞かされてきました。このジレンマは今でも変わらないと思います。つまり、具体的な話になかなかならない。

現場の教師に関して言えば、社会科教師の集まりに四五回招かれて話をしたのですが、その時の注文が宗教を社会科教育の中にどう取り入れたらいいのか、というものでした。そういう問題意識から、例えば神奈川県や兵庫県の社会科教師のグループに招かれたことがあるのですが、これまででは考えられなかったことです。これは大きな変化だと思います。

実際にそういう先生方が、京都や奈良の修学旅行でど